



Title	都心で伝えるアイヌ文化：ヘリテイジトレイルの試み：札幌市
Author(s)	山村, 高淑
Citation	日経グローバル, 200, 54-55
Issue Date	2012-07-16
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/50276
Rights	本著作物は、日本経済新聞社の許諾を得て掲載しています。日本経済新聞社の許可なく内容の全部又は一部を複写・転載することを禁じます。
Type	column
Note	日経グローバル(2012.7.16. No.200)「観光地点検」掲載記事
File Information	nikkeiglocal200_54.pdf



[Instructions for use](#)

札幌市

観光地点検

北海道大学観光学高等研究センター准教授
山村 高淑

都心で伝えるアイヌ文化 ヘリテイジトレイルの試み



北海道におけるこれまでのツーリズム開発の大きな問題点の1つは、先住民族の歴史・文化・現在に対する無知・無関心そして軽視である。明治時代の同化政策以降、長きにわたり政府並びに国民の多くは、先住民族問題に無関心であり続けた。

北海道の偏ったイメージ

しかし近年、「アイヌ文化振興法」の施行（1997年）、国連による「先住民族の権利宣言」の採択（2007年）、衆参両院での「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」の採択（08年）など、北海道の歴史・文化は大きな見直しを迫られている。

そうした中、道内各地の観光の現場でもアイヌ民族・アイヌ文化の正しい理解を促進しているという機運が高まりつつあり、白老や平取町二風谷、阿寒

など、アイヌ文化が色濃く継承されている地域がその先進地として注目を集めている。その一方でユニークな取り組みも現れ始めた。札幌という人口190万人の大都市、しかも都心部を活用したヘリテイジツアーの試みである。

観光地としての北海道は、「フロンティア精神」やクラーク博士の「大志」といった言葉で形容されることが多い。明治の開拓期のイメージである。特に札幌というまちはそれが顕著であり、そうしたイメージの中心に北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）と札幌農学校（現北海道大学キャンパスや時計台）がある。そして札幌を訪れた旅行者のほとんどがアイヌ文化に触れることなく札幌を離れていく。しかし、先住民族文化としてのアイヌ文化への理解や尊重を抜きに、ことさらフロンティア精神やロマンを語る観光プロモーションやプログラムは歴史を曲解して伝えてしまう危険性がある。

北海道は先史時代より人が連続と住み続けてきた土地であり、明治期以降の開拓の歴史は北海道史のごく一部に過ぎない。つまり、現在の北海道の文化とは、

先史時代、アイヌ文化期、開拓以降の文化が重なり合って形成されている。特にアイヌ文化は現在の北海道文化の基層をなすもので、札幌の都心部でもその痕跡を見ることができし、現在の生きた文化にも触れることができる。

こうした背景から、北海道大学アイヌ・先住民研究センターは、筆者の所属する観光学高等研究センターと共同で、アイヌ民族の積極的参加を得ながら、09年に先住民文化遺産ツーリズム・ワーキンググループを立ち上げた。そして、札幌駅周辺から北大キャンパスに至るエリアを中心に、旅行者・一般市民が実際に歩きながらアイヌ文化を感じ、理解することができる「文化遺産発見のための散策コース（ヘリテイジトレイル）」の開発を行っている。

目的はサポーターを増やすこと

このワーキンググループでは、トレイルを利用する対象者として、これまでアイヌ文化に接点の無かった人々、アイヌ文化に興味を持っていなかった人々（札幌を訪れる旅行者の多くがそうである）を位置付けた。そしてトレイル開発の目的を、ツ



北大キャンパス内に自生するトウモロコシ（オオウバユリ）の調理法を解説するガイド



かつてはサケが遡上していたアイヌ民族にとって重要なサクシュコトニ川

リズムを通してアイヌ文化への理解者を増やし、文化振興・継承へのサポーターを増やしていくことに置いた。

したがって、トレイルのコースも単にアイヌ文化に限定したものではなく、従来の開拓期を象徴する観光スポット（北海道庁旧本庁舎や時計台、クラーク像やポプラ並木など）に、先史時代やアイヌ文化期を象徴するスポット、そして現在のアイヌ文化に触れられる場所を組み合わせた。歴史の重層性を違和感なく感じることができ、そうした歴史が今も継続していることを自然に理解できるように配慮している。

例えば、札幌市中心市街地コース（所要3時間）を例にとると、次のような具合だ（地図参照）。①偕楽園（1871年開設の日本初の都市公園、先住民族の生活の場としての湧泉）・清華亭（明治天皇行幸の際の休憩所）②北大付属植物園（約

1000年前の擦文時代の住居址、先住民族の生活の場としての湧泉）③道立アイヌ総合センター（アイヌ民族の歴史・文化に関する展示）④北海道庁旧本庁舎（樺太関係資料館）⑤時計台（札幌農学校・開拓の歴史）⑥札幌駅前通地下歩行空間など（現代のアイヌ民族による刺繍作品、アート作品）。

同様に、北大キャンパス内のトレイルも、キャンパスを南から北へ蛇行するサクシュコトニ川（かつてはサケが遡り、アイヌ民族が漁を行っていた川）に沿って、竪穴住居址から、アイヌ民族の漁労施設出土地点、アイヌ語地名やアイヌ民族が活用した植物、明治以降の歴史的建造物など、1000年以上に渡る歴史を約3時間で重層的に触れるようになっている。

今後のポイント

アイヌ民族自身が主体となって、先住民族の「現在」を伝え

る必要がある。というのも、道内各地の現行の先住民族関連のツアーは、歴史や伝統文化の説明に重点が置かれることが多く、今を生きる先住民族の姿を知ってもらうという視点は十分ではない。

現在都市部ではアイヌ民族は「和人」と全く同様の生活スタイルで暮らしているが、アイデンティティもしっかり持ち、文化も継承しているということも、アイヌ民族自身の生の声を通して知ってもらうことが重要だ。アイヌ文化は決して過去のものでもなければ滅びてもないからだ。

この点で、アイヌ民族のガイドの存在は非常に重要である。単に知識をツアー参加者に伝えるだけでなく、ツアーを通して参加者はガイドと交流し、先住民族の人間味や生活臭を等身大で感じ、親しみを覚えることができる。こうした体験は、地道ではあるが、先住民族の理解者を増やし、文化継承や権利回復へのサポーターを獲得していくうえで非常に有効な手段となるはずである。

札幌での取り組みでも、アイヌ民族の若手有志がガイドとして活躍している。ツアーは未だ試行段階であるが、アイヌ民族による主体的な先住民族観光が育っていくことを切に願うとともに、道外の読者諸賢にもこうした状況に関心を持ってもらえれば幸甚である。

